読者だより

細川闘争報告に日共反論できず 大阪総評大会で

大阪 F・O

第二十六回大阪総評定期大会が九月十九日、二十日と守口市民会館で開かれた。私は二日目の会議に出た。前日の運動方針案をうけて修正案の提出が求められた。全自運、全国税、大教組ほか二単産（日共系）より三つの修正案が出された。

①政党支持を自由にすること、反共デマをしないこと②青年部組織を確立すること③部落解放運動を解放理論にのっとって行なうことが、主な内容だ。

討議が開始された。全金の労組員が反対意見をのべた。「支持政党は何にも上からの押しつけでやってるんと違います。僕らの意見を正しく国会で反映させてくれる人を選んで支持しているんだ。だからしめつけなんか少しも感じていない。また、反共反共と言うけれど僕らは反共ではない。共産党というても沢山ある。中国もあればソ連もそうだし北朝鮮もそうだし、まあ、日本共産党もあるネ。そして、それぞれみんな違うやないか。日本共産党を支持しないからといって反共になるのか。たとえばプロ野球でいえば巨人も西鉄もいろんな球団があるけど巨人のファンでなかったらプロ野球を否定することになるんか。だから僕らは反共ではない。だいたい日本共産党がだらしないから支持されへんのだ。暴力集団キャンペーンをはるけど、日共も昔はやってたやないか。それをキチッと総括せえへんからあかんのや。二・一ストを回避したのも日共やし、四・一七ストもそうやし、最近では原水爆に対する態度もコロコロ変えてます。しっかりしてほしいわ」。

その他、全電通からも反対意見が出された。結局、日共の修正案は、みんな否決された。そのあと全金細川鉄工より闘争支援に対するお礼のあいさつがあった。経過報告をするなかで日共のおかしな反階級的な行動が次つぎと暴露されていったが、会場にいた日共からは一言の反論も出なかった。

支局通信

東京支局は、十月一・二・三日に開くパレスチナ・ポスター写真展の準備に忙殺されているような現状です。幸い、パレスチナ支援の各団体を中心に、山谷労働者、三里塚闘争支援、市民、ウーマン・リブの女性などの方々の協力を得られたため、準備期間の短かさ、私達の力量の不足、資金面の不充分という欠点をなんとか克服出来ました。

チリ反革命クーデターと長沼ナイキ判決の記事は、それらに詳しい方に直接原稿を依頼しました。「新左翼」に積極的に協力して下さる方々が、どんどん増えつつあるのが東京の状況です。

（東京支局）

月三回の読者会を定期的に行なってきて、今までただ新聞を配布し、それを読むだけに終っていた散在的な人びとが、今後、目的意識的に新聞を活用し、討論し、また行動をする場ができたように思う。と同時に、支局の活動を発送と読者会のみにせばめ、解消していてはならないことを感じている。多くの人びとの意見をもっと新聞に反映できるように今後一人一人の行動をもっと広めていくように努力したい。

一時中断していた読者訪問を再び始めます。また、当面「関西人民学院」の開校準備に積極的にとりくみたい。九月十八日読者会は、チリクーデターについて現在のクーデターを全く正確に予言していた「新左翼」七月五日号の書評の記事を中心に話しあった。

（千里支局）

労活労働者に
政治闘争の提示を
党ー組合の関係どうあるべきか

ベイルート 中野マリ子

職場でしんどいが、はりあいのある闘争をになっている少数派の労働者と全国労働組合活動会議（準）に参加している個々の労働者に最大の期待をこめて私が感じていることを述べたい。

労活の報告によれば資本・敵権力の攻撃は、公害・社会問題などの日本帝国主義分析はきわめて正しく、日本では革命の問題が日程にのぼらねばならない内乱状態であるにもかかわらず、私たち労働者は日共や社会党の歴史的裏切りから政治的に成長することができなかった。そして新左翼諸派に党を求めたが理解できないまま、今にいたっている。この結果、党に対し排他的になり、嫌悪さえ持つようになった。しかし、闘争が深化すればするほど政治的に成長することの必要性を感じ始めている。わたしたち労働者階級側が、はるかに遅れをとっていることを認識した上で言いたい。

組合闘争を激烈に闘っていれば政治的に成長するなどの幻想をもってはならないと思う。あくまでもレーニンの言っているように政治は外から別個なものとして注入されるのだと思う。それが党の任務だと思う。しかし党が不在であるため、党を模索しつつ自力で政治的に成長せねばならないと考える。労活に結集している労働者が多数派労働者に質的に勝利するとは、資本体制に与えられる闘争のみでなく別個の質の何かを労働者に提示しなければならないのではないかと思う。そして、これこそ対政府闘争でなく、われわれの政治闘争なのだ。すなわち攻撃的労働運動（階級的労働運動という言葉は原則的に間違っているのではないか？労働運動も階級闘争なのだ。日本労働運動の歴史でゆがめられたから、このような表現なのだろうが、本来階級的とはおのれを労働者であるだけではなく、労働者階級に高めた人民をさすと思う）とは労働者革命を目標にしているかどうかであると思う。

ロシアの労働者が十月革命以前に未来の社会主義体制を内包したソビエト（評議会）を組織した。このようなものを未来的に労活労働者が組織しうるような政治的能力を獲得するかどうかにかかっていると思う。そのためには、労働者であるからこそ革命的ロマンチシズムのかおる共産党宣言や、マルクス・レーニンの文献を熟読せねばならないと思う。

いま私は「世界をゆるがした十日間」を何度もよんでいる。すばらしい本です。そして以下の文章はローザ・ルクセンブルグからかりた言葉で、党と組合の関係について こう 言っている。

「労働者階級の階級闘争に経済的闘争と政治闘争という二種類の闘争があるわけがない（階級闘争のこの二つの側面が技術的な理由からブルジョア議会主義の時代には相互に分離されているのだ）。ただ一つの階級闘争があるだけなのだ」「ブルジョア社会のワクのなかで資本家の搾取を制限することをめざす（組合）と同時に、搾取はもちろん、ブルジョア社会そのものを一挙に廃止する（党）ことをめざす闘争である」「もちろん、組合闘争もまた、それを裏返しにしたような議会闘争も共にブルジョア社会を基礎にして行なわれる闘争であることに違いない。労働組合が経済的改良活動であるように議会闘争は政治的改良活動である」

「労働組合の闘争は、集団の利害などの現在の問題を包括し、党の闘争は労働者階級の解放への関心、未来の問題を内包している。労働組合は党に対し、全体に対する部分の関係である。理論上ではすべての労働者は二重に組織されねばならない。二種の集会に出席し、二種の会費をおさめ、二種の労働者新聞を読むべきである。これができるためには、まず高度な知性が必要であり、つぎに労働運動に対する純粋な義務感から時間と金の犠牲を毎日でもいとわない理想主義が必要であり、そして党・組織に属することによって充たされうる情熱的な関心と革命的ロマンチシズムも必要である」。

労働者からの批判を乞う。

九月十三日

国鉄労働者の顔色悪いわけ

京都 S・M

国鉄にのっていて気になることがある。それは運転士、車掌、駅員のとくに年の若いのにもかかわらず、顔色が悪く頬がこけおちているのを沢山みかけるということ。きけば国鉄の夜勤は月に新幹線で十回、他は十二回まで労使間でみとめているそうではないか。しかも二十四時間連続勤務の二日休みという変則八時間制が基本になって勤務表がつくられているという。

これでは若い者でもからだがもたないのは当然だ。最近国鉄就職希望者がとみにへっており、入ってもすぐやめるのが多いときくが、なるほどとうなづける。

昔もそうだったという人がいよう。しかしはたして昔は今ほど列車本数があったろうか。今は夜勤明けに家へ帰って、ゆっくり休めるような家を持っている人は国鉄に何人いるだろうか。おそらく局長や総裁の官舎ぐらいのものではないだろうか。

これは国鉄労働者だけの問題ではない。われわれは毎日一日に二〜三時間は彼らに命を預けているのだ。そんな状態で安心して生命を預けることができるだろうか。私は今なおこんな勤務態様の下では、事故がおこっても何の不思議もないように思う。これは日本の労働者全ての問題のはずだ。他の組合で問題にならないのが不思議だ。

こんなことをいうと必ず国鉄は赤字だからという人がいる。しかし国鉄が金融機関から借入れる資金の利子は不当に高いのを御存知だろうか。国鉄が銀行や保険会社のいいくいものにされているのだ。運送業だけなぜ同じ業種に民営と国営と両方あるのか。もうかるものはどんどん民営にして、もうからないものだけ国営にのこし、今の国鉄になったのではないか。それが証拠に大口荷物は不当に料金が安い。国鉄が赤字だからという理屈は矛盾している。そうなら私鉄もトラックもすべて国営一本にすべきだ。国鉄をくいものにしながら赤字だというのは実にタチの悪いサギやタカリのいい草だ。

国鉄にいるかぎり二十四時間変則勤務や月十二回の夜勤は当り前という考えをぶちやぶっていかないかぎり、国鉄からますます若い者は去ってしまうし、国鉄労働者は病人だらけになってしまうだろう。

国労や動労はたしかにつよい組織だ。しかし指導部が働く者のこのような悲惨な状態に眼を向けないというのは、まだまだ当局との間になれあいがあるからではないか。

南大阪労働運動への弾圧で感じる事

大阪 S・H

大阪府警は十七日、恩貴島運輸の労働者三名を逮捕し、二十一日釈放した。これは住友電工側の告発がないかぎり、いくら警察とはいえできないものであり、「双方責任追及はしない」との協定を、住電側が一方的に破棄し組合に挑戦してきたものである。

先日進水式の日に時限ストをうった佐野安ドック分会に対しても、何を恐れたのか大阪府警は、三台のバスに機動隊を満載にして会社の近くに待機させた。

大阪府政が革新府政だから機動隊はうごけなかった、という住電闘争について日共の評価は労働者をたぶらかすための寝言であることが明らかになった。

たとえ黒田革新府政であろうとも、警察は最近労働組合におされっぱなしの南大阪の資本家（うしろには関経連がついている）のいうことの方をよくきくものだ。

日共のたわけた寝言を信じていたら、チリの例をみるまでもなく、労働者は資本家権力からケツの毛まで抜かれてしまう。南大阪の労働運動も警察権力との激しい対決の時代に入ったのだ。心を引きしめて明日の闘いにそなえよう。

好きでもかなわぬ平和革命

兵庫 S・O

前略Kさんの紙代を同封します。試読紙長い間ありがとうございました。お話し合いをして、一年分の紙代をいただきました。

私を通じて送るのは「紙代の郵送もしてくれるほうが世話がない」ので、私が送っとくからと紙代をその場でとるのです。送料は勿論、私負担ですが、これは運動のためですから仕方ありません。

先日、6チャンネルの細川隆元と藤原弘達の放談の中で、チリのアジェンデ氏の自殺にふれて、議会主義による平和革命というものはあり得ないことがあれでも証明できるし、クーデターの評価を忘れてはならないというようなことを言っていましたし、九月十五日号の貴紙「火焔ビン」欄にも書かれていました。

それでも世の多くの主婦たち、クーデターをきらう主婦たちは平和革命が好きなのです。大変虫のよい話で、世直しはしてほしいし、それがガラス一枚割らずにしてほしいし…なんです。

チリやインドネシアの平和革命が駄目なことを、掘り下げて、続きものにでもして載せて下さったら大変ありがたいと思います。

取上げてほしい事

兵庫 T・H

前略御沙汰しております。社説「差別告発運動について」は、私もかねがね思っていた事で時宜に適したものと思います。金大中事件も徹底的にフォローして下さい。チリ・クーデターはアジェンデのやり方にも拙速があったようにいわれますが、こういう面も国際欄で取上げて下さい。

〈投稿歓迎〉
▽字数・五百字前後▽住所・氏名明記・紙上ではとく名▽送り先・大阪市北区池田町21安田ビル二階新左翼社「たたかいの中から」係へ

獄中通信

次は本紙一五八号に掲載した川島豪氏（京浜安保共闘議長）の赤軍派批判に対する塩見孝也氏（赤軍派議長）の反論である。

（編集部）

× × ×

連赤敗北における山岳根拠地路線の意義の明確化を〈一〉

東拘 塩見孝也

〈一〉

川島氏たちは赤軍派・革左派（日共革命左派）両派が一連の七一年ゲリラ戦の展開後、山岳に「左」翼日和見主義的に逃亡し、都市ゲリラ戦から山岳根拠地路線に反動的に後退・転換したこと、この転換こそが向山、早岐両同志の処刑を先鞭（せんべん）とした大量粛清への軌道をすえてしまった一重要契機としての意義ないしは温床としての意義を軽視ないしは無視していると考えます。

このことは、この後退が革左によって最初に試みられ（赤派も同様なのだが）、この理論的基礎には中国革命の教条化が存在し、また、この推進には獄中、獄外を問わず全ての革左の諸君が、はっきり批判してこなかったこと、従ってこの責任は永田君たちの責に帰すことができないこと、また氏たちの連赤敗北の総括視点たる「反愛（反米愛国）の放棄ー反愛の護持」の主張に、まっこうから背反する事実であることからして都合が悪いこと、故だと考えます。

それ故、山岳根拠地路線の反動性・日和見性を指摘する赤軍派に対して「赤軍派は連赤敗北の責任を転嫁している」「連赤敗北の因は反米愛国にある」なるデマをねつ造し、自らの弱点に触れないようにけん制し、なんの発展・脈絡関係もないまま森君の「プロ独、社会主義革命」にもとづく粛清の指導性を全体から切り離して「事実は事実として」なる論法で、特殊にとり出して強調せんとするわけです。それ故、山岳根拠地路線の反動性を粛清への全発展・全関連関係を明確化するなかで、その位置・性格を明らかにして、これが粛清の一重要契機（全ではない）、温床となっていたことを事実問題と関連させつつ指摘し、革左諸君に革命戦争の実践的教訓として山岳根拠地路線の最後的克服と「外国の経験ー靴に自分の足を合わせ、自分の足に靴を合わせようとしない」愚たる中国革命の教条主義的適用を克服するよう訴えたい。

この忠告を歪曲して、被害妄想的に「赤軍派の革左への責任転嫁」と氏たちが解釈するのは勝手ですが、結局、山岳根拠地路線は実践によって放棄されるか、さらなる敗北として氏たちにはねかえってくるでしょう。このことは革命戦争の普遍的教訓なのですから。

なお、きょうは氏たちとの論争の関連や山岳根拠地問題、中国革命教条主義を取りだしただけで、われわれの連赤敗北の総括はこれにとどまらないのは明白です。それは、次の総括の方法、観点でも明らかです。従って革左の諸君を批判することが総括の中心でないことを重ねてことわっておきたいと思う。

〈二〉

連赤敗北の形成過程の脈絡・特質をあげれば

（イ）七〇年、七一年の安保大会戦の悪循環の中で形成されたHJ（ハイジャック）、12・18、2・17、連続M作戦、6・17などの端緒的ゲリラ戦は七一年後半段階でベトナム和平ー中国人民外交にみられる国際的階級関係の持久的対峙への転換、ゲリラ戦の発展それ自体が生みだす攻防関係の深化の中で集中砲火をうけ、更なる成長・飛躍を問われた。その飛躍は、端緒期の自然発生性・小ブル性ーこれは、マリゲーラの「都市ゲリラ戦」の無批判な賛美にも現われていたーを克服し、プロレタリア革命戦争に転換すべく、この闘いをけん引してきた赤軍派、革左の思想、政治、組織、戦術、作風ー規律をブルイにかけるものであった。この転換は、革命戦争の原動力たる根拠地を獲得する問題を含んでいた。（続）

読者だより

連赤の革命性主張 内乱罪適用を要求

九月末の連赤裁判で

東　京　L・W

連赤の裁判が九月二十六日、東京地裁刑事七部（山本卓裁判長）で第二十回公判を迎えた。被告、弁護側から「一連の連赤の行為は、暴力革命をめざしたものであり、刑法七十七条の内乱罪に該当する。従って一審は法の規定通り東京地裁ではなく東京高裁で審理すべきである」として、裁判の管轄権の違い、更に「被告たちが政治的確信に基づいて資本主義体制を覆そうとするのは、内乱以外の何ものでもない」（井上弁護士）という主張から検察側のいう暴力革命が、リンチ殺人事件も引き起こすものといった中傷を糾弾し、組織的、計画的に準備され実践された暴力革命の正当性を守り、新たな裁判闘争の方向性を明らかにしたものとしてある。

しかしながら、二十九日の二十一回公判において、検察側は内乱罪の適用や東京高裁での審理には応じない態度を示し、十一月一日、二日に次回の裁判を迎える予定である。

日・米帝国主義者への闘うプロレタリア・人民の革命戦争への決起は、粛清問題が事実であるとわかると最も好都合のキャンペーンの材料として利用し、闘う者への動揺、組織的壊滅に奔走した。狂気集団として宣伝、印象づけは、ブルジョア支配階級が、武器をとって革命的に決起し闘う人民に狼狽した姿であり、彼らの闘いの本質を意図的に隠蔽し、歴史上から抹殺しようとしているが、この歴史的位置づけこそ、長時間かけても正しい総括のもとにわれわれ自身が、われわれの階級闘争史上に偉大なる闘いとして厳然と位置づけていかなければならないのである。

弁護団は過去の日本階級闘争史上に残る自由民権運動のなかで、明治絶対政府の転覆として、人民武装蜂起が貫徹された明治十七年九月の加波山事件にこの類似点を見、連赤の本質である革命性、思想、そのことの正当性を明らかにしようとしている。

加波山事件にて、被告たちが主張した「たとえ不完全なる政府が作為したる私法にもせよ、その法律の明文に従い、不当なる予審終結を取り消し速かに高等法院に移すの言渡しあらんことを」との抗議も退けられ、五月に起きた福島事件の質を内乱陰謀の観点から裁いたことで人民の敬迎の的とされたことから、加波山事件では、最初〝国事犯〟として扱われていたにもかかわらず、十八年には常事犯として「強盗故殺事件」として処刑されていった。

当時はロシア・ナロードニキのアレクサンドル二世暗殺事件（M14年）の影響もあったが、その時代的背景が異なるとはいえ、裁判方法において弾圧においては現在と同質であり、更にはより教訓化されているが—逮捕地での分離裁判、蔵匿罪の適用、革命性の隠蔽のためのキャンペーンは、支配階級の変わらぬやり方である。現在において その最大の目的は、民主主義の名のもとに法がブルジョアジーを延命させるものとしてあり、その生産手段の掌握も維持しているブルジョアジーに自らの名誉、出世の道具としてなおそれを守り抜いていく裁判官、検事の姿がある。

坂口被告から「房に入ると線香がたかれ、死んだ同志のカラー写真が置かれ、房をトントンとたたくいやがらせがなされている」との発言があるように、日々精神的錯乱、思想的攪乱、肉体的マ滅を強要し、思想的解体—転向をせまるものとしてあり、獄中にあってもあるいは現在進行している国民健康総合調査の名のもとに思想チェック、政治傾向を調査し、患者、精神病質者として処分されようとしている人々、それをとりまく地域住民の対応、などから全国的保安処分をもくろんでいる。これこそファッショ体制の何ものでもない。連赤被告をあくまで防衛し、意図的に進められている裁判に結集し、監視の目を光らせよう！

そしてわれわれがここで確認しておかなければならないことは、連赤の革命的闘いを、リンチ殺人、同志殺しとの歪曲から、指導部、個人批判をすべきでないこと、連赤に結集した革命家たちが、統一をめざし、さらには党建設をめざしその途上で粛清問題が起きたのであり、当然にも政治路線の違う各党派の総括が成されなければならず、これは現在なされていると思う。しかしそこにおいて階級闘争の観点からではなく、人間性のみを強調し、ブルに屈服し無関係なものとして処理する傾向を批判しなくてはならない。

このブルジョアジーの攻撃をはね返す闘いをわれわれは自らの共産主義者としての任務を遂行し、民主主義的要求闘争、経済闘争を日共の生活基盤の民主主義まさにブルジョアジーの担い手としての—それを粉砕し、われわれの闘いが何によって高めあげられ、何を当面目ざさなければならないかの課題を明確にし、全ての闘いが何に従属されなければならないのか明確にしていかなければならない。

経済闘争こそ政治闘争であり、資本のもとで賃金労働者としての生活を余儀なくされている労働者の闘いなのであるから。

×　×　×

支局通信

パレスチナポスター展、ミッドウェイの横須賀母港化阻止闘争などで支局はしばらく混乱状態にあります。また、人員もいろいろな事情で半減し、いま支局開設以来最もしんどい情況です。しかし、十日過ぎごろから何とか種々の混乱も整理がついてくるでしょうし、人員もふえる見通しにあります。

読書会、読者まわりの遅延などいろいろ読者の方に迷惑をかけ、本当に心苦しく思っております。われわれは力量のなさを何とか克服しようと努力しておりますが、そのことはそれ程たやすいことではなく、今後も一層しんどい思いをしなくてはならないと、みな覚悟している次第です。

ポスター展は、何とかうまくいきました。次号に詳細を載せるつもりです。（東京支局）

ある遺族の母から連赤の一被告への手紙

横浜拘置所　佐藤　保

九月二十九日付ブル新によると連赤「公判」も被告の意見陳述に入ったということです。本紙にもこれまでいくつかの異なる角度から連赤に関する文章が関係者から寄せられ、掲載されてきました。

この意見の相違は今後、思想闘争と革命実践の検証をうけて解決されていくので、今のところ意見の相違は相違としていくことで、なんらかまいません。ところが、これが尾を引いて被告、遺族、支援者が団結して敵権力との「公判」闘争にあたるべき共闘機関である連赤公判対策委まで事務局と世話人会の二つに分裂してしまいました。

これが影響して、公判対策がはなはだ立ち遅れているようです。迷惑しているのは被告・遺族でしょう。カンパ、支援してくれる人も迷っているでしょう。こういう状態は一刻も早く克服されねばなりません。

次に紹介するのは、連赤「事件」で犠牲になった今は亡きわが一同志のお母様から連赤の一被告にあてて出された手紙です。

このお手紙には、一年半の間、亡き同志との対話を通して思索され、研磨された〝母の心〟が簡潔な筆致の中に深くにじみでていると思います。この手紙を一人でも多くの人に読んでいただき、連赤「事件」、連赤「公判」、公判対策委などを考えるときの指針にしてもらいたいと思います。

十月一日　佐藤　保

◈　◈　◈

お手紙ありがとうございました。

殺されたニュースの時は、あまりのことに信じられませんでした。娘の変わり果てた姿に、何故殺されねばならなかったのと私は心で叫んだ事でした。

父はなく、娘は私としばらく二人きりで暮らしていました。それが家出して、ひたすら革命の道をめざしておりました。考えれば哀れでなりません。彼女は活動家である以上、私もしだいにあきらめ、ただ心配で、捕まることのないよう祈るしかありませんでした。家ではやさしい娘でしたが、ずいぶん話し合いましたが、決して考えを変えようとはしませんでした。

お友達の名も決して私にも用心して言うことはないのですが、一度だけ、アルバイトの話が出た時に、娘が自分はアルバイトしても安いけれど、薬学出の人がいてその人はずっと余計お金もらえるの、私はいいし、えらいわ、と言っておりました。

昨年、せめて現場に花でもと思い、二度迦葉山に行きました。現場に立っていると、亡き娘の声が聞こえてくるようで、辛い場所でした。

あなたが娘のこと信じてくれたら、まだまだ信じる道のために活動していたのでしょうが、二十四才のわずかな人生を、あの子は精一杯生きて果てたのですから、何もしなかった人より有意義な人生だったのです。よく世間の人達は連赤を気違い扱いしますが、それを聞くと腹が立ちます。リンチ事件は別として、皆必死に考えて行動したのでしょう。彼らの心情は私にはよくわかるのです。

殺した人、殺された人、深く考えれば、決して彼らがすべて悪いとどうして言えるでしょうか。辛く悲しいのは殺された人達ばかりではなかったのでは、と思うのです。ただもっとも深く考え学ぶ時間をやりたかったと、今、そのように考えるのですが、当時のことを思うと、皆殺気立って冷静さは失われていたのでしょうか。

この頃は、もう誰を憎んでも仕方ないこと、亡き娘も憎んだとて喜びはすまいと思うようになりました。近くのお墓に行って、じっと手を合わせると、在りし日のあの娘の姿が浮んできて、泣かないでと言っているような気がするのです。あの子も遠い所から世の行く先を見ていることでしょう。あの子達が理想とした世はなかなか来ないかもしれません。でも、歴史の中に、いつかは生きることもあるのかと思うのです。

中は暑さもひとしおでしょう。どうぞ御大切に、御元気に、おすごし下さいませ。

八月十三日

▽…………△

宛先間違い訂正せぬのは作風の問題

兵　庫　S・S

前略

貴所からいつも「新左翼」送付いただいていますが、宛先がずっと間違って来ています。この間違いについて、今まで三度も連絡していますが、いまだに訂正がありません。今後送って下さるのでしたら、このハガキの宛名にして下さい。訂正されない場合は返送します。よいものを出しても作風や注意力にあまりにかけると意味なしません。

友人に貴紙を

大拘　宮本礼子

毎号ありがとうございます。

七月の終りに同じ大拘の者へ差入れしていただきましたが、あの後すぐ判決になり、下獄しました。「新左翼」非常に喜んでくれて、出たら（昭和五〇年の始め）ぜひ事務所へ行くと申しておりました。

ところで、再び差入れお願いしたいのですが、東拘の××の所へ入れて下さい。お手数かけますがよろしくお願いします。

私のほう、公判は今まで四回終え、次回からは証拠調べに入ります。検事のエゲツないデマを粉砕すべくがんばりたいと思います。あまりにも今まで弁護士まかせの安易な気持ちでいたような気がして反省しているところです。

（編集部　読者の皆さんの同志や友人の方で獄中にある人を紹介して下さい。「新左翼」を無料で差入れます）

保釈出所しました

支援の皆様に感謝

神奈川　大森直史

前略　九月二十一日午後二時三十分頃、無事保釈出所いたしました。皆様のこれまでの御援助に対して心よりの感謝を申しあげます。

監獄にあって始めて自分たち以外の多くの闘いの存在と、また、獄中戦士をなにがなんでも守ろうという人びとの存在を知り、かえって世の中が広くなった思いでした。独房の中での独善におちいりがちな思考、そして思いあがりとその裏面としての孤独感という動揺をのりこえさせて下さったのは、貴紙を始めとする多くの人びとの絶大なる御支援でした。

この一年七カ月の生活で、私はほとんど人生観そのものを転換しえた気がします。皆様の御援助に本当に何度お礼を申しあげても足りない思いです。

貴紙をひきつづき購読したいと思います。お金、その他のこと、どうでも連絡下されば、と思います。では、また。

（編集部　次号より大森君の獄中記「囚書記」を連載する。昭和四十七年二月十六日逮捕されて以降一年五カ月にわたる東拘生活の実態が赤裸々に報告されている。）

タダで読むほどゴーマンでない

豊　橋　T・K

私は注文した覚えはないのに、最近貴社発行「新左翼」が私のところに送られてきます。私は現在、購読する意志はなく、また夕ダで読むほど無神経でもゴーマンでもありません。それに、意向を無視して（無料）で送りつけるのは、誤った思想ではありませんか。以後送付しないで下さい。必要なら購読の手段はあり、また、購読する気になれば自分の方から手続きをとります。

獄中通信

連赤敗北における山岳根拠地路線の意義の明確化を＜二＞

東拘　塩見孝也

（ロ）この転換の核心は、革命主体がいかにして、いかなる革命戦争を遂行する思想的・政治的原動力を獲得するのか、であり、その物質化として党建設・作風、規律を推進・保持するのか、としてあった。これは階級と階級闘争から「海外」や「山岳」の根拠地に召喚する日和見主義と闘い、都市に踏みとどまり、革命戦争の依拠基盤を少ブル革命勢力からプロレタリア革命勢力に移しかえ、かつこれと一体に、このプロレタリア革命勢力の経済・社会・政治生活状態を資本主義批判を軸とするマルクス・レーニン主義の立場・方法・観点で科学的・階級的に解明すること、プロレタリアートに依拠するマルクス・レーニン主義によって始めてプロレタリア革命の思想的・政治的原動力を獲得できること、これによってブルジョア・小ブルジョア思想を粉砕しうること。

また、毛沢東思想のレーニン死後の国際的・歴史的指導的地位の認定を前提にし、この観点から反スタトロツキズム（反スタマルクス主義）の小ブル自由主義・無政府主義の側面や「日本中共派」の小ブル民主主義・民族主義的側面たる「人独—民民革命」の中国革命教条主義を克服し、プロ独・社会主義革命の路線を革命戦争の遂行にみあって豊富化、発展させること。

これらの思想・政治問題を組織、作風規律問題として物質化すること、ブルジョア・小ブルジョア思想を最後的にこのようにして克服し、「左」右の日和見主義と両面で闘いつつ自然成長的・戦術左翼的・戦闘団主義の党建設の路線を克服すること。

戦術面では、革命戦争が開始されたからといって、単純に機械的前進運動のみをとらず、情勢の変化に応じて無限の変化をとるが故に、情勢に応じて革命戦争路線を堅持しつつ、党として転換する指導能力を問われること。また、ひとたび革命戦争が開始された以上、組織・規律の違反や非プロレタリア的作風は、組織に全滅の危機を惹起（じゃっき）するが故に、規律の重視・整風と同時に断固たる正しい処罰の遂行が要求されること、革命戦争時、党とプロレタリア革命勢力のなかにプロ独権力を樹立する闘いと一体に始めて前進してゆくこと。

（ハ）かかる思想・政治面の飛躍とこれを抜杆（こうかん）とする組織、戦術、作風＝規律における飛躍・転換に対して、赤軍派、革左両組織は革命戦争の最先端で闘ってきたが故に、最初に遭遇し、種々な革命的志向を部分的に生みだしつつも左翼日和見主義の誤ちを犯し、またこの誤ちを正当化することによって反動化していった。両派ともにそうなのだが、まず革左の諸君がこの転換に対決・解決しきれず、12・18、2・17の革命的戦闘後の超包囲攻撃のなかで思想・政治工作を強め、これを組織工作に結びつけ、都市に踏みとどまり、この高度な思想・政治・組織力を源泉にして、規律・処罰を堅持することができず、都市から山岳に逃亡し、これをもって「革命戦争の根拠地問題を解決した」と称した。

先進国プロレタリア革命戦争の根拠地は、党とその思想・政治・組織力そのものと、統一戦線にもとづくプロレタリア革命勢力の前進などの要素から成立する現代帝国主義の矛盾の集中点たる都市の政治的・社会的・地理的条件のなかに求められるべきです。先進国において根拠地を山岳に求めることは、階級と階級（戦争）からの完全な召換を意味し、いわば左翼的に粉飾された逃避行の極限形態を意味するに過ぎず、その階級的本質は反動的な、小ブル共産主義の自己権力主義・山岳社会革命主義です。

中国その他の人民戦争の山岳根拠地—解放区は、周囲の農民の階級闘争の中心に位置し、これにしっかり結びついて発展成長したものであり、階級闘争の政治的・経済的・社会的・軍事的中心に位置していたのであり、これらを満足させるものとして地理的条件が選択されていたのに対して、この「山岳根拠地—解放区」は単に地理的要素のみに依拠した「かくれ家」以上の域を出てないのです。

（つづく）

☆　☆　☆

読者だより

関西人民学院に参加して

大阪　F・O

田中機械の大和田委員長より、南大阪の戦闘的労働運動の報告をうけた。南大阪の労働者の闘いは、話を聞き、文章にふれるたびに感動せずにはいられない。とくに八百六十三日もの昼休み集会を貫徹し、ガードマンの暴力にも屈せず、勝利を闘いとった細川鉄工の闘いには、「すばらしい」と言うより他ない。細川勝利の報告を初めて聞いた時、どんなに勇気づけられ、自分の進めている闘いの不十分さを思い知らされたかしれない

しかしわれわれが今必要なことは、彼らの闘いをすばらしい、立派だ、と讃美することでは決してない。同じ労働者が結集していながら、南大阪のような組合もあれば、資本の先どりをした労務管理を行う組合もある。少くとも現場で汗水流して働き、日々資本の圧迫の下にある労働者に、もともと、それほど大きな違いがあろうはずがない。いったいどのような過程をへて、どのような条件の下で、南大阪の労働者があのように労働者らしくなったのだろうか。われわれが学ぶべき点はここにある。

私も二、三度南大阪の労働者と接したことがある。ひとことでいえば彼らは全く普通の労働者である。しかし彼らは組合事務所に気がるに集まり、他の企業の労働者のことを、まったく自分のことのように考える労働者だ。けっして、理屈や、義務感で闘いに出ているのではないことは彼らと会えばすぐにわかる。第一、義務や理屈で八百六十三日も闘えるはずがない。

私のまわりには、組合のことといえば「きめられたから」としか言わず、会社のレクリエーションを話題にし、いつもQCサークルの提案（製品の品質をいかにたかめるかを討論し、会社で提案を出す労働者のサークル）を考えている労働者が多い。しかしいくら彼らがそのように見えていたとしても、本当に納得してQCにうちこんでいる労働者は、やっぱり少数だということがわかってきた。まして下請に働く労働者には、かくれた大きなエネルギーがあることを、私のごく小さな経験からもはっきり言いきれる。むしろ、私は労働者であるかぎり、必ずや南大阪のような闘いに参加できるはずだと思う。だからこそ彼らの闘いが貴重であり、すばらしいのだろう。

それならどうすれば、そして彼らはどうやって現実にあのような闘いをつくり出してきたのか。そこのところは、いまのところはっきりはしない。第一、大和田さんの話をきいただけでそんなことがわかろうはずはない。私は自分が参加している闘いの発展の一つ一つを通じて、彼らの闘いから一つ一つ学んでいきたいと思う。むろん今の段階でも学んだ点は多くある。今後も何度かこういう機会をもち、もっとざっくばらんな討論がもたれることを学院に希望したい。全国の突出した闘いの報告をずらりとならべ、「これはすばらしいのだ」といった集会のもちかたにだけはぜひしないでほしい。闘いのまっただ中で苦闘している人々の要求に奉仕する、もっとざっくばらんで、どろくさい学院の運営を心から願う。

高槻　H・M

私は高槻の住民で、人民学院がある事を聞いて参加しました。

十月十一日、大和田幸治さんの講演を聞きました。この講演の中で私なりに大切な事を二つほどつかんで帰りました。一つは地域闘争の意味で、一つの労働組合の賃金値上げ闘争一つでもそれが地域全体に影響がおよぶ様に目的意識的に労働者の問題としてゆく事の重大さ、企業のカベを破るありとあらゆる手段を考える事が階級的労働運動になくてはならない事であるという事と、もう一つは労働運動における団結権の問題で、日共の内部分裂運動に対して、労働組合と権力の緊張関係を第一次的に考え、その中で分裂者に対し統制権を使うが、その場合あくまでも多くの労働者の利益が考えられ、労働者階級の運動をつぶすものに対してその力は向けられるというのです。学生の小ブル的な内ゲバとちがって何かプロレタリア闘争に欠落した前衛の問題の根本原則になる思想・プロレタリア独裁の思想がある様に思いました。私はこの人民学院という学習の場で色々と学びたい事、考えている事を発表し、少しでもいいから現在解らないで困っている事を考えてゆこうと思いました。

新左翼とは何か
「少し考える会」で討論

東京　R・M

九月十五日板橋区で〝少し考える会〟が開かれました。この日のテーマは「新左翼とは何か」で、もと代々木にいたというロートルを中心に討論が進められました。その一部をここに御紹介します。

Aさん（戦前から印刷工、一九四八年日共に入党）

五一年綱領は、それまでの日本の抵抗運動を問い直す機会となった。以来既成コミュニズムに対する疑問が色々な形となって出て来た。そして、六全協、七回大会、六〇年安保の過程で、これまでの日本の闘いの歴史もろとも断ち切った様々な党派の芽が出て来て、それが今日新左翼なるものとなった。それと一緒に、運動の中に「自己否定」や「怨念」とかいう観念的な情念的なものが入って来た。そして今そういう感覚主義がゆきづまりつつあると思う。

Bさん（三十代後半の人）

今の若い人達、とくにセクトの若者に見られる押しつけ的な側面、あるいはセツナ的なやりっぱなしの傾向の発生源は、これみな、日本の歴史的退廃時代にあると思う。そしてその根底にあるのは個人主義思想だ。今の若い人達がどうしても乗り越えねばならない思想的壁だと思う。昨日はこう思っていたが今日はこうで、明日はこうだというのは基準がないということだ。もう今の日本の闘いは趣味ではやって行けない。

Cさん（四十すぎの教育闘争をやっている人）

私は王子闘争の時、いきなり「新左翼」になってしまった。あの時あたり前に闘ったら、あくる日の朝刊に私達が新左翼だと書いてあった。他の住民達とおどろいたものです。「え、俺達が新左翼だとよ」と。今私は教育の問題をやっていますが、今の若い人達の種々の欠陥は主として教育に責任があるように思います。今の教育は全くひどい。先生自体に自覚がないからなおひどい。人間をダメにする教育以外の何ものでもない。人間に対する評価の基準が教師も子供もくるっていて、教師は子供を小バカにする。子供は小バカにされないようにテスト、テストにたえぬく。全くひどいものです。

獄中通信

連赤敗北における山岳根拠地路線の意義の明確化を〈三〉

東拘　塩見孝也

したがって、かかる極端な日和見主義を隠ぺいしようとすれば、「左翼」的に「銃を守るための闘い」としての根拠地の防衛」「将来の銃によるセン滅戦の唯銃・唯軍主義の決戦論」などの名文が持ちこまれ、（実際は全くの消極的防御で「かくれ潜んでいるだけで」）観念的な思想・政治闘争が、中国革命とダブラされて強調され、この観念的思想・政治闘争（「共産主義化」実は指導部の恣意への絶対的屈従）の「違反者」「敗北者」を、その思想・政治的背景ぬきに「プロ独ー鉄の規律」の名のもとに実際は個人利害にもとづいてブルジョア独裁とブルジョア厳罰主義で「処罰」することになる。

たった一人の通敵分子の輩出すらもが「根拠地」を全滅させるが故に「脱落分子」や「党中央への反抗・不満分子」が「通敵・反党危険分子」として予防的に粛清される危険性を生みだすのです。

かかる脈絡の中で向山、早岐の両同志は「通敵分子」として処罰されたのです。いわば両派の指導部が、転換・飛躍に正しくこたえきれず、山に逃亡し、この行動を「左」翼日和見主義的に正当化したその時から、処刑ー大量粛清は準備されていたわけなのです。粛清は日和見主義個人の利害の下に、「銃を守る闘い、銃によるセン滅戦ー共産主義化ープロ独の規律」の「左」翼的ペテンで革命的・戦闘的同志をだまし、隷属させようとしたところに本質があります。

だが、この「左」翼日和見主義の山岳根拠地路線は、革左にあっては人民独裁の民族解放民主主義路線、中国革命の教条化によってその正体をボヤケされていたこと、それ故に永田君だけに責を求められるべき性格ではないと思う。

赤軍派は「国際根拠地ーHJ作戦」の教訓から、根拠地問題を地理的諸条件に求める方法や観点の日和見主義を克服し「人民戦争の要素」にもとづく都市地下革命戦争の路線をしいていたが故に、また、本来の「プロ独、社会主義革命」の政治的立場からしても「国際根拠地」のミニ国内版たる山岳根拠地路線に、すぐ妥易に後退することはなく、山岳問題には軍事訓練基地の範囲でのみ積極的に評価、活用し、6・17闘争を闘い、また、資金調達闘争を闘い、また第一ゲリラ隊は「連敵の危険」の問題に際しても都市ゲリラの経験を生かし、処刑を避けた正しい処罰を創出しつつあった。だが、さらなる転換の矛盾を正しく解決しきれず、革命戦争路線から山岳根拠地路線へと左翼日和見主義的に後退していったのです。

かかる赤軍派の後退の一歩一歩の里程として向山、早岐両同志の処刑の認容（ウヤムヤ化）「遠山同志の作風批判」に媒介された都市プロレタリア革命戦争の作風の放棄と山岳社会革命主義の作風の許容などが存在したわけです。

このように赤軍派が山岳路線へ後退した要因は（イ）、（ロ）の前述の展開に加えて、赤軍派が全共闘運動を基盤とする小ブル学生勢力を基盤とし、また資本主義批判を軸とするマルクス・レーニン・毛沢東の綱領的立場に立ちきれず、反スタ・トロツキズム、反スタ・マルクス主義を完全には克服していず、「プロ独、社会主義革命」が有名無実化されており、実際は小ブル革命主義の反権力主義を払拭しきれていなかったことです。これがわれわれの敗北の主体的内因であります。私はこの内因の解明を軸に連赤敗北の主体的総括を行なってきたつもりです。私はこのことを論そうNO・1～3で一貫して強調してきたつもりです。　（つづく）

×　×　×

支局通信

パレスチナ ポスター写真展を終えて

東京支局

三日間のパレスチナ・ポスター写真展を終えて、支局員の第一に感じる事は、「やっとどうにか終えた」というのが情けないながら正直なところだ。というのはこうした大衆情宣などは、東京支局にとって始めての試みであったし、さらに労働者で構成されている東京支局は、それまでパレスチナ問題を取上げて専門的な討論の時間を持つ事がなかったため、今度のポスター展を行う上においても権力の悪どいデマに対して、我々の側の宣伝を文字どおり大衆レベルで行うというぐらいの認識の一致しかなかった。その事が準備の段階にもまた、当然ポスター展の内容そのものに大きな欠落点を生む事になった。

リッダ空港闘争につづいて、日航機H・J闘争から、まだ日も浅く、露地裏ならぬ団地の階段でも、職場でも、日本人を含むというアラブゲリラと、日帝の茶番に殺されかけた乗客の話題が、いたる所でうずを巻いていた。そんな時、東京でもポスター展をやってみてはの話があり、私達支局員は全員、「よし、やろう」という事になった。しかし、ここで「何んでパレスチナ・ポスター展をやるのか」という点が明確ではなかったのである。

確かに中東の石油問題が日本の革命状況に及ぼす大きな影響はわかっていても、「何故、今？」「どんな方針の下に」「どんな目的を持って」というのが、すっぽり抜けたまま私達は、あわただしい準備に追われるはめに落ち込んでしまった。私達はわずか×名たらずの、しかも日々、厳しい労働のあい間に、五十枚近いパネル作り、ビラすり、ビラまき、チケット売りという作業に追いまくられる事となった。時間はひと月となかったし、他の集会、会議への出席や取材という仕事もあった。もちろん皆、自分の職場での工作という仕事もあったのだ。毎夜徹夜の状態が続き、皆はれた目をこすりながら出勤して行く日が続いた。そして準備にかかって十日目ぐらいから、小さな問題にしろ、ちょこちょこ顔を出す様になった。手持ちのチケット五百枚はあらかたさばいたにもかかわらず、ほとんどお金は入って来ない。その日まくはず材料費がない。パネルののビラが出来ていない。予定された場所でビラまきがされていない。ビラまきの効果自体が問題にされる、等々。つまり個人個人が自分にかけられた仕事の責任を放棄する部分が日ごとに増えてきたのだ。

無理もない。背負った仕事がどんなものであれ、つらい中でやりぬく為には、その仕事に対する主体性が必要だ。何故、今、我々がパレスチナ問題をポスター展という形で情宣するのか。その確認の不足がそのまま個々人の仕事への認識の不足ー主体性の欠如という所へ来てしまった。私達は作業の手を止め討論に入った。しかし時間は飛ぶように去り、開催一週間前、大きな実りのないまま、とにかくやり抜こうと決意を新たに、やむなく討論を打ち切り、再度、準備にとりかかった。

当日、十月一日の午後なんとか会場の扉は開いたものの、正直なところ、パネル作りに追われ、ビラまきに奔走していた我々は、かんじんのポスターを座み写真に写し出されたパレスチナの現実の説明に、ほとんど手を抜いていた状態だった。詳しくそれを知りたいと思う人は、またお金を出して各パレスチナ支援団体で出している資料を買わねばならなかった。それでも協力団体から借りて来た写真と、我々がせっせと作ったパネルばりのポスターは、あわせて百枚近い数で広い会場も狭い程であった。また地理的条件が悪く、宣伝もビラのみの割には、百二、三十人が見に来てくれたのは感激だった。

ビラまきに関しては、新宿のターミナルでは回りのくずかごを一杯にしたものだったが、会場近くの団地、中野駅、各大学の前では、たいていの人が熱心に目を通してくれた。会場近くでまいたビラは、やはり一番効果があったと見えて、見に来た人の半数は会場近辺のおじさん、おばさん、近くの工場で働く労働者であった。この人々は、そっと入って来て、そして何を聞くわけでもどんな意見をいうわけでもなく、しかし真剣に展示物を見て、帰りには必ず資料を買って行った。受付の者が語りかけても、たいていの人がぼそぼそと口をにごし、それでも写真やポスターの下の説明は熱心に読んでいた。「映画なんかと一緒にやってくれるとわかりやすいんだがねェ」とか「すごいわね、今、現実にやってるんですか」とかいう言葉が時おり聞こえた。

読みやすそうなアラブレビューが最も売れた。むずかしそうな言葉のつまった資料は学生の姿が見えず、さっぱりだった。

応援に来てくれた学生が、私達が団地にビラをまいた事に驚いていた。パレスチナ問題の映画会などよくやるが、団地まで情宣に入った事はないといった。私達は大衆というのはお題目ではないと思った。現に、我々の努力があれほど主観的で、手まえ勝手にもかかわらず読みにくいビラを見て、来てくれた人がいる。

我々はこの間時間的に苦しいなか六千枚のビラを中野、新宿、池袋、水道橋、御茶の水の駅前と水産大、日大、立教大等々の大学、高校で連日まき続けた。その過程の中で、先にいったようにビラまきに対する確信がゆらぎ、とって読まれるビラが少ないことに失望し、やっても無駄だという形で内部に混乱をもたらしたりした。しかし中東戦争の再開に象徴される現在の中東情勢の中で、我々のまいたビラの何枚かとポスター展の成果とは今や確実に生きており、アラブ・パレスチナ解放闘争への日本人民の連帯と今後の情宣活動へとつながっている。

またその少ない金と時間と能力で、このポスター展を一定成功させたことは、経験として大いに意義があった。しかしながら、職場に重要な闘いを持つ労働者の貴重な時間をすべて投入せねばならなかったことは、即ち我々の弱さは、今後に重要な課題として提起されている。

（文責　美才）

定期購読します

沖縄　U・H

「新左翼」を定期購読します。送って下さい。

七二年（復帰）で沖縄問題は終ったというような顔をしている人びとに異議を申し立てるのだ！

黙ってなどいられるか！と。いうように更に「運動」していくもんね。

貴社のニュースを友人から借りたりして読んでいて、いわゆるセクトの自己賛美的、正当化的、排外的etcのイヤラシサがなくて熱読しています。これからは定期購読をしたいと思います。

共通の敵を倒すために！

チバリョー

パンフレット

プリント発行

「国鉄新幹線における職業病との闘い」京大安全センター実行委

発行　関西労働者安全センター　三百円

新左翼社に三百部だけあります。

訂正　一六四号六面「連赤の革命性主張、内乱罪適用を要求」の記事中、最後から五行目以降次のように変更します。「経済闘争から政治闘争に高めあげ、資本のもとで賃金労働者としての生活を余儀なくされている労働者の闘いとしていこう。」

たたかいのなかから

三里塚支援とは

東京Ｈ生

東京の板橋区、練馬区を拠点にして、三里塚闘争と闘いの犠牲者を支援している「三里塚犠民友の会」は、さる十一月九日夜六時半から板橋区民会館で「支援運動と映画の集い」を開いた。

集会には東京タワー事件の被告で、現在、沖縄に朝鮮人慰霊碑の建設活動を進めている富村順一氏や、三里塚現地からかけつけた青年行動隊、台湾独立運動を進めていることにより日本政府から国外退去令を発令されている林景明氏を支援している人など四十名あまりが参加した。

集会では、はじめに三里塚東峰被告の畠田郭志氏が、公判闘争の現段階や敵権力のテロリンチがくり返される三里塚現地の状況、今後の闘いの決意などをのべたのち、「金も大事だが、鉄塔を守ることがいちばん重要な援護射撃ではないか。『支援する会』ではなく『ともに闘う会』でなければならないのでは」という富村氏の発言をめぐって論議はふっとう。青行隊からの「職場で三里塚を自らのものとして闘うことが〝支援〟になる」という発言や、「友の会」の結集基準である「いつ、どんな場合でも最低闘う人たちの妨害者にならない」との主張に、富村氏も「異議ナシ」ということになった。

ついで、昨年八月から九月にかけ、日本全国の心ある人びとの耳目を集めた相模原での戦車移送阻止の闘いをなまなましく表現した映画「戦車をとめる闘い」が上映された。

昨年八月五日、横浜市にある村雨橋での戦車前座りこみから始まる一ケ月半の実力阻止闘争、そして機動隊の目にあまる弾圧……。映画は「ただの市民が戦車をとめる会」（梅林宏道代表）の動きを追いつつ、闘いを追体験させることをとおして、ベトナム人民殺しのM48戦車、それを守りぬく日本の行政や警察権力への怒り、さらに拡がる市民運動の力強さをみる者全ての心にきざみこんでいった。

四年後の秋

東京　中野明

六十九年佐藤訪米の秋を最も戦闘的に闘い抜き、浪人という原点において七十年東大入試阻止闘争を貫徹した旧全浪連（浪人ベ平連）が四年ぶりに結集した。まず四年間の報告があり、裁判闘争及び今後の企業内告発の支援が確認された後、自衛隊解体・早大解放闘争について具体的な議論がなされた。死の商人グループ財閥企業に就職内定の欠席者から力強いアピールが寄せられたが、それが特に珍らしく感じられたわけではなく、各自が同じ問題をかかえ、企業・学園・役所で体制と対決していくことになるだろう。東洋工業（朝日ジャーナル）事件をいかに乗越えるかということだけでもこれからだなという気がすごく強い。

東拘　雪野健作

先日、控訴審の一回目の公判がありましたが、弁護側しか控訴していないためか、ほとんどの証人申請が却下されてしまいました。まったく不当な訴訟指揮で腹が立ちます。そんなわけで、二審判決は予定より早くなり、来年二月か三月になりそうです。総括作業を急がなければならないと考えています。

東京支局の活動も板についてきたようで、紙面もますます充実してきたようです。社説の新設も、政治方向を明らかにするという意味で、一歩前進です。今後も、党の再建という究極の目的を一刻も忘れず、さらにがんばって下さい。

福岡　Ｓ・Ｙ生

前略

先日はわざわざおいでいただきましたにもかかわらず、留守をして失礼致しました。御許し下さい。

「新左翼」は購読させていただきます。代金は振替でお送りします。

貴紙の存在は全く貴重であると常々考えております。いろいろ大変でしょうが、皆様おからだに気をつけてがんばって下さい。

敬具

横浜　Ｈ生

毎号興味深く読ませてもらっています。購読をふいてまわっているのですが。「雑炊性」は悪でなくて善です。止揚の環が獲得されるまでは雑炊性を断乎推進して下さい。

草々

〈投稿歓迎〉

▽字数・五百字前後▽住所・氏名明記・紙上ではとく名▽送り先・大阪市北区池田町21安田ビル二階新左翼社「たたかいの中から」係へ

支局通信

〈東京支局〉

東京支局の事務所ができて三ケ月あまりになります。この間、支局のメンバーはせいいっぱいがんばってきましたが、それぞれが職場をもつ労働者であり、時間的制約や、新聞活動と職場での労働者工作との矛盾などの問題がつきまとい、読者の要請にこたえうる支局活動が充分には展開できなかったかもしれません。

こうした問題をもつ支局を補強し、首都圏での労働者人民の闘いをより広範に全国に伝え、思想変革と大衆活動の前進に役だつ新聞活動の充実のため、この十一月から大阪の編集部より東京に支局常勤者が派遣されてきました。

すでに活動を開始していますが、読者の皆さんの中で「新左翼」に対する疑問、意見、希望をお持ちの方、また、「この闘いを全国の仲間に知らせたい、訴えたい」とお思いの方、電話でも手紙でもかまいません、遠慮なく東京支局へ連絡して下さい。可能な限り出むいて話をうかがいにいきます。

また、集会や催しものの案内、闘う武器として活用されているビラ、パンフ、新聞などもお送り下されば、有効に生かしていきたいと考えています。

なお、いままで東京支局として活動していたメンバーは、今後、多摩分局として支局と密接な連携をとりつつ、多摩地区を拠点に独自な活動を進める予定です。

（Ｈ）

囚営記〈その二〉

一年五ヵ月の東拘生活から

大森直史

四八房にはその夏いっぱいいて秋に二八房へ移された。

二七房には岩淵英樹君（警視総監公舎爆破フレームアップ事件被告）、そして三六房には九・一六三里塚闘争被告鈴木君と、いずれも一年半以上という古株がいた。その二人が今年の夏前にあいついで出た時は、何となくさびしかったものである。

その後二七房に殖産住宅の事件で取り調べをうけていた男が二十数日いた。彼は朝の十時から夜の十時ごろまでも取り調べをうけていた。そして帰ってくると私の房との境の壁を叩くのである。うるさいのと、もし返事をしてああいう類いの男と「秘密」（壁を叩いて合図をすることは勿論「通声行為」として懲罰の対象である）を共有する事が危険だろうと判断したため私は返事しなかった。そしてあまりうるさいので木のテーブルで思い切り叩いて「恫喝」したらそれはやんだ。

しかし考えて欲しい。同じ長時間の取調べにせよ、東拘にいれば弁当をあつらえることも、菓子果物をとることもできる（事実彼は途中で弁当をのぞいて他の差入れをことわることになっていた）。二百日間もデカに完全に食事を「制圧」されている昨今にあって、いかに彼らが優遇されていたかを。

彼が二十五日ぐらいですでに保釈出所した後は、仏大使館でつかまったインターの村木君が入っていた。彼はウェーブのかかったすてきな髪を坊主刈りにし、ひげを鼻下にたくわえていた。タリク・アリ（第四インターの国際的指導者）がこの夏日本で各地をまわって宣伝活動をしていたそうである。

私はこれらの人々についてまったく未知であった。又、彼らももちろん私の事などしらなかったであろう。

私は以上のような事情を「救援」紙にのっている記事、裁判日程等でえた知識を看守、雑役たちが名前をよぶのや出廷する日時等で特定したのである。（「救援」の用途は実に広いのである）隣近所のことが気になるのは実に「団地妻」ばかりであった。しかしそうやって一方的「知人」を作る事は数少ない楽しみの一つであった。

五　森君自殺の日の出来事

森君が自殺した日、私は意外によかった正月の御馳走にうかれて、はしたなくも「木やりくず」などをうなっていて、普段あまり大きな声をださない看守にどなりつけられた。（私は歌をうたう事が非常に好きで、しばしば看守にどなられた。一度は新しい歌謡曲の歌詩をかきためて、糸でとじておいたノートをみつけられ、大変おこられた）

正月の御馳走はまさしく意外によかった。しかしたまに普段よりいいものを支給するということは―もちろん相対的にではあるが―不満を抑圧するという点では最高の戦術である。野坂えがくところの「色がえり」という短編の養老院とまったく同じである。私などはもちまえの食い意地のせいで、沖縄「返還」の日の汁粉をくってしまい、後で気がつき自己嫌悪にさいなまれた。よくはわからないが皆拒否したらしく、実に沢山くれたのだった。

二日の夜七時のニュースは（始めて森君の死をわれわれが知ったニュース）いくつかの疑問を生じせしめた。ニュースではわれわれが始めて聞いたニュースなのに、「朝のニュースで自殺を知った他の被告（永田君や板東君の事らしい）は平静の中にも云々」などと報道した。

東拘で放送を色々区別してきかせるなどという事はちょっと考えられない。女区と男区では野球放送等の時には別の放送をするらしい。（しかし男は野球、女は歌謡番組などという区別も実に下らない差別ではないか。僕は野球にはほとんど興味がなかった。しかしおそろしいもので、しまいには金田ロッテの大ファンになってしまった。看守に「巨人の野球はいわば官僚軍隊の野球で、ロッテは金田ヒットラーをシンボルとするファシズム軍隊の野球だ」などといった珍論を展開して煙にまいたりしたものである。）

そして自殺の物理的可能性についても大いに疑問をもった。実際に実験までしてみたが、どうももっと確実にできる方法があるように思えた。

その後、公判の度、地裁地下の仮監で断片的に情報が入った。その真偽は多分に又聞きが多く保証のかぎりではないが。

彼が自殺した場所は私のいた新三舎の向いの新四舎三階三一房であったらしい事はほぼ一致していた。私の所からもみえたはずだが、その日に限ってあまり外をみなかった。私の「共犯」が四階にいたのだが、彼によると何やらさかんにフラッシュをたいているのがみえたそうである。

新四舎の二階には死刑囚たちがいた。森君がいたのはその上である。

情報の一つに、二日に四舎からお棺が二つつづいてでた、という奇妙なのがあった。この情報は当時五舎（私と反対側から四舎に面している雑居房のみの建物）にいた地面師からのものだが、話した感じでは精度に確信はもてない。

そのうちに森君の房の二つくらいしかはなれていない所にいた、という話の感じも割合信用できそうな情報が入った。

それによると「ポリ容器（缶詰等の食品をあける為のいわゆるなんとかウェアーというふたつきのもの）が臭いがする（たしかにするのである）。PCBなどの検査はしたのか」と抗議したりで、なかなか元気だったらしい。事件の当日、一時までの昼寝（三食昼寝つき、まさに団地妻である）の後、正月の菓子を雑役がくばっていて、その雑役がまず発見したそうである。そして非常ベルの音で沢山看守がかけつけたが動揺するばかりで、酸素吸入器がきたのは三十分もたってからの事だったそうである。その後も正月で医師がいず、取り扱いがわからず、やたらシューシューという音と、ああだこうだという言い合いがつづいたらしく、それが三時ごろまでつづいたそうである。

事実関係やその情報源の感想では発見した時にはまだ生きていたらしいことはほぼ確実のようである。（この情報源からは「二つのお棺」はでてこなかった）

獄中通信

連赤敗北における山岳根拠地路線の意義の明確化を〈四〉

東拘　塩見孝也

以上から連赤の共産主義化＝粛清は、都市にふみとどまり、プロレタリアートに依拠する、資本主義批判を要とするマルクス＝レーニン主義のプロレタリア革命戦争の路線へ、自然発生的小ブルジョア革命戦争から両組織が転換しきれず、山岳根拠地路線に後退し、向山早岐両同志の処刑を先鞭にし、大量粛清への軌道がしかれ、双方が互いに作用しあいながら、最後は双方が合成し、少ブル革命戦争、左翼日和見主義の反動化の全面開花に至ったこと。この過程での森君の指導権、牽引性は事実です。だからといってこれが山岳根拠地―山岳社会革命主義を引金としての軌道の段階的・連続的な発展・転化のうちにあったこともおさえておくべきです。私たちは事実問題を重視しますが、恣意的に都合のいい事実を引出し羅合するのでなく、上記の如き発展の脈絡・連関関係のなかで弁証法的唯物論的に把えます。

「森君処刑の提案が作用しており、山岳路線が先にあったのではない」の「提案の事実」はともあれ、森君の意見が永田君の「スパイ説」を前提にして提出されていること（坂東、植田君の言）【通敵分子に処刑が適用されても不思議ではない】、また他組織の参考意見をウノミにすることは非常識です。また永田君はこの処刑を当時の軍事競争における優越感として表現していたのではないか。「二度とスマイ」と心の中で反省していたにせよ、その理論的基準として山岳根拠地路線を採用したことにおかない限り、自己批判は口先だけのものにならないか。「遠山批判を飛躍させたのは森君」といわれるが、「遠山批判」は都市ゲリラの作風を「赤軍派は苦労が足りない」等と称しつつ山岳社会革命主義の作風に転換させる役割をもっていたのではないか。また森君の論理化は既にしかれてしまった山岳根拠地―山岳社会革命主義の許容、完成の役割をもち、追認的役割をもっていたのではないか（積極的ではあったが）。

〝「赤軍派は誇らしげに私は思うのだが、「我々は山を降りるものは殺すと確認している…」は全くデタラメです。共同軍事訓練の時はまだ山岳根拠地路線を決定しないことからして、こんなことはいうわけはない。「山から降さない」という提案は反対側からなされたのではないか〟「坂東君（体育学とは毛沢東の『体育学』のことであり、決闘とは全く関係ない）」と、勝手な想像です」またあの手紙に関して、永田君は不用意なあのような発言と公表について誤りを認めたのではないですか。

（一面からつづき）

「労働安全衛生法と産業医科大学」の講演がなされ、医療機関の反動化が指摘された。午後の討論は、研究者独自の闘争としての現代科学・技術批判闘争―毒物タレ流し糾弾闘争と地域労働者・住民との共闘、ブルジョア大学解体闘争としての施設解放闘争の問題について討論がなされた。その他九大、京都府大などからのアピールがなされた。

総括全体集会は第一分科会A・B部会、第二分科会、第三分科会の各分科会報告があったあと、キノホルム薬禍中毒と闘っている仲間、矢橋から公害をなくす会、関西障害者解放委員会からの特別アピールがあり、会場は連帯の熱い雰囲気に包まれた。

次に、集会実行委員会事務局より基調報告がなされた。この中で、昨年十一月の第一回集会で確認された基調が、この一年間にわたる諸情勢、労災職業病闘争の経験に依って基本的に正しかったことを示し、この路線のより一層の拡大、発展が要求されていることの確認がなされた。そして当面する新たな課題として、次の二点が提起された。第一に災害被災者家族への支援と共闘の拡大。第二に、労災職業病を闘う活動家関西ブロックと関西労働者安全センターのさらなる強化拡大。

会議はこのあと、さる十一月十七日、京大総長あてに提出した京大施設解放要求書を断固支持するとの内容を盛り込んだ決議文を満場の拍手の中で採択し、最後に高らかに「インターナショナル」をうたい閉会した。

パンフレット

書簡集１

連合赤軍の獄中書簡集

☆書簡発行に対する獄中からの意見☆拘置所に移管され接見禁止とけた直後の手紙、岩田平治、坂口弘、植垣康博、寺林真喜江、坂東国男、吉野雅邦、青砥幹夫、加藤倫教

発行＝長野救援センター、加藤君を守る会、愛知救援センター

連絡先＝長野中央郵便局私書函一〇一号振替長野一五七九一、名古屋東郵便局私書函四八号振替名古屋三八八二三

カンパ二百円、〒五十円

たたかいのなかから

値上りのなかで

堺　E　子

久しぶり用事が出来て姫路へ行った。出がけに友だちから"みやげにチリ紙をどっさり買って来て"とたのまれた。毎朝、マーケットの前で早くから並んで買っているそうだ。姫路にはチリ紙がまだあった。大きな袋にしてたま買いこんで帰った。それから半月たったあと、すっかり姿を消していたチリ紙が店頭に山積みされた。倍近くの値上りで。次には洗剤がない。灯油がない。近所の奥さんたちは血まなこになっている。毎日の食費の値上りには頭がいたい。今年の年末一時金は、一年間の借金のアナうめにはとても足りない。

職場は五年前に位べて倍以上の仕事量、人一倍増えると三人分の仕事をかかえてやって来る。とにかく忙がしい。組合は日共がガッチリ。何かと云えば民主連合政権が出来たら、すべてがうまく解決すると宣伝する。賃上げ、一時金の闘争も全くお座なりである。何とかしなければと思う。

皆、がんじがらめにしばられ、しぼられている。その中でも女性は、やりくりに、そして社会の仕組みの中でさらにふんづけられていると思う。家でやりくりに追われている主婦、職場で差別されている女子労働者は、今の世の中で最も底辺だと思う。

チリ紙を買いに朝早くから立ち並ぶ主婦たちが、いつの日か闘いに起ち上るために、私は仲間が欲しい。

灯油は産業用を削って家庭へ廻せ

大　阪　S　生

家庭用灯油の削減は許せない！日本は外国と較べて産業用の石油消費量が非常に高く民生用のそれが少ない。日本の産業用石油消費量は三十五％と極端に高く（主要な資本主義国で三十％をこえるのは英国だけ、イタリア、フランス、西ドイツは二十％代、アメリカは十％に達していない）

日本の石油多消費型の産業構造をかえるのが今がチャンスなのだ。誰でも灯油がなくて困っているのではない。一率十％削減が公平なのだと考えてはならない。今までが不公平だったのだから、何も遠慮することはない。今こそ産業用を削って、家庭用へ重点的にまわすために闘いに立上ろう。

沖縄　O・N

毎度「新左翼」を送って頂いて、ありがとうございます。今後も購読を続けるつもりです。なお購読料の支払い方法、金額をおしらせ下さればお支払い致しますのでよろしく。貴社の御発展をお祈りします。

支局通信

〈東京支局〉

東京に来て三週間、活動の方もようやく軌道にのってきました。交通事情をつかむこともあって、いろんな集会に参加していますが、思うことは、どこかで見た顔だな、という人の多いこと。まだまだ「左」翼の世間はせまいようです。最近の情勢は、支配階級がいままで通り支配することが困難になり、人民の側もいままで通り抑圧されることに耐えられない状態に一歩一歩近づいていることを示しています。

労働者階級の階級的団結、思想的前進と無縁なセクトの「内ゲバ」なるものを全戦線から一掃し、一刻も早く人民大衆の「左」傾化と合流することーそのための武器として「新左翼」の果たす役割は、いよいよ重要なものとなっています。

「いったいどういう世の中になっていくのか、これから先どうすりゃいいんだ」…労働者大衆の不安、焦そう感は高まるばかり。激変する情勢の特徴と闘いの方向をさし示す予見性が、いま、何よりも紙面に求められているのではないでしょうか。

（H）

読者訪問記

横浜・川崎・千葉

新左翼社では九州中国地方につづき十一月に横浜川崎千葉の読者を訪問した。残念ながらあうことのできなかった読者も可成りいたが、次はその時よせられた読者の感想意見である。

横浜　A生

「新左翼」は読んでいるが、私たちにはちょっとむずかしいですね。左翼用語にあまりしたしめないんです。国際欄はあまり関係ないので読まない。

われわれ港湾労働者はいま夜間就労拒否闘争をやっています。日本資本主義は港湾労働者をふみ台にして高度成長してきた。以前はずい分ひどかったが、このころヤクザもそうむちゃくちゃはしなくなりました。

組合と業者団体との全国協定をむこうから一方的に破棄通告され、いまでは各地区ごとに闘争をすすめなければならず、弱くなりました。関西の方が地域闘争が成功しているように思うが、関東はだめです。

共産党は独善的だ。労働者が長い間苦しい闘いをしてやっと取った成果を、まるで自分達がやったようにいいふらす。

誰が新聞を送ってきたのかと思ったらKさんの紹介なら読まないわけにはいかないですね。

神奈川　B生

セクトが悪いという風には考えないが、セクトのなかにいると矢張り男のなかに指導力のある人がいて、女は運動のなかで差別されることが多いように思います。特に女は育児からのがれることができないから…。

婦人民主新聞をずっと以前から愛読しています。この新聞は婦人にとっていい新聞だ[illegible]定期購読します。振替であとからお金を送ります。

千葉　C生

戸村さんの立候補についてはすべて同盟に一任するという形で話がついたと思います。というのは仮りに選挙期間中に三里塚に重大闘争がおき選挙活動と現地闘争と二者択一がせまられたときに、あるいは選挙に勝った[illegible]でも同盟の意見を[illegible]ろといえばいつでもやめるという事です。だから仮りに国家権力が鉄塔を強制排除するようなことがあれば断固実力で闘いぬくべきだと思います。

議会を活用することについては必ずしも否定しないが、私の場合、今までの路線と何かしっくりしない気持ちです。

川崎　D生

戸村選挙を「新左翼」が支持するなら新聞はいらない。[illegible]ッチしないのがわれわれ[illegible]んだから。住民運動[illegible]だ。われわれは先[illegible]たもの、人民から[illegible]を大企業が目茶苦茶に[illegible]っているんだ。

「新左翼」は左翼[illegible]よみにくい。俺がビラをかく時には小学校六年生の教科書を基本においてかく。セクトの新聞は全然読む気がしない。

横浜　E生

私は何回かアフリカへ行ってきたが、よくもまあ日本の資本はこんな奥地の奥まで進出したものだとびっくりします。ウラン、銅などアフリカから持ってきているが、石油危機で日本は窮地に追い込まれたため今後開発などに力を入れてくるでしょう。

コンゴの山奥には日本鉱業が入っているが、二千六百名の従業員のうち四百名が日本人です。日本人と現地人の結婚が沢山あり、子供もできている人がいるが、日本に帰る時はほっていくといっています。

東南アジアや韓国から研修生という名の下に日本にきている人のなかにずい分苦情があるそうです。これらの事実を集めて欲しい。

囚管記 〈その三〉

一年五ヵ月の東拘生活から

大　森　直　史

六　進む監獄の反動化

その後、それまでだいたい日に一回だった「房内捜検」がつづけざまに全部の房でやられた。どういうつもりかうすいビニール一枚でできている子供の海水パンツに使うようなチャチなバンドまで、所有している者をチェックしていた。看守の「見廻り」もふえ「熱意」も数段増したようだった。（私は一度目は窓のそばにズボンをつるしていて、二度目は例の「実験」をしている所をみつかってえらくどなられた。）

だがそれ以前に十五分に一回は各房を見ていたというのはウソである。特に正月の一日はそうである。一房から五十房までほぼ百メートルはある廊下を、休みなくゆききする看守はまったくいなかった。

ある看守の話だと森君の事件の後、法務省の役人が見廻りにきて実に多くの文句をつけ、被告の私物の許可範囲にしても、少しでも長いものを一切とりあげてしまえ、と息まいていたそうである。（おそらく生れて始めてだろう）

話は又別になるのだが、私が四十七年四月にきてから数カ月は、理髪のとき普通のハサミ、洋カミソリを使っていたのだが、それは使われなくなった。スポーツ刈りでも何でもすべてバリカンでやるのである。そしてカミソリはシック付とかいうT字型のしゃれた物になった。これについてはカミソリをかっぱらって腹を切った男がいた、という情報と時期的にも付合する。

ここにみられる官僚の発想は、とにかく何かあったらそれを禁止してしまう。その他にも運動場ー雑居のーですもうをしてケガをした事件があったら、その後はすもうを禁止してしまうというような例もあった。こういう極めて安直なそして官僚としての自己の責任範囲を何とか守ろう、という極めて自己保身的なものでしかない。

死のうと本気になれば舌をかんだって、壁に頭をぶつけたって死ねる。ここには環境をよくして死ぬ気をおこさせないというアメの政策すらない。いたるところムチである。

おそらくあらゆる機会に監獄での反動化は進行するだろう。東拘でもわずか一年十ケ月の間に、本の取り扱い等にも明らかなように、政治誌等をしめだそうという改悪があった。長期間閉込めておくという事から、その間に肉体的にも精神的にもだめにしてしまうという陰謀は現実に進行している。今日、多くの人達によって闘われている獄中生活改善闘争は実に大きな意味を持っているだろう。警察国家完成のための全体的な反動化のなかで、看守たちがしばしばなげつける「悪い事をしてきたくせにぜいたくいうな！」という論理は最大限に活用されるだろう。

九月三日に行なわれた東拘前での改善要求闘争は、われわれ以外の被告達にも少なからぬ影響を与えたようである。五日に私は廷出し、地下の仮監で何人かの人たちに三日のアジテーションについてきいた。彼らはあきらかにそれが自分達にもよびかけている事を知っていた。だがそれがそのまま同意という程のものでなかった事も事実だった。

三日はいかにも迷惑げに「うるせえな」とつぶやく看守たちのそれとは明らかに違っていた。三日のアジテーションはそれまでの何回かの包囲デモのそれとは段違いによく聞えた。その時私はちょうど運動で、外でもきいたし又もどってから房内でもきいた。聞える度合いはさほど違わなかった。ただ風のせいか音が大小すること、しゃべり方によっては聞きとりにくいという事はあった。男の人の声で一言一言区切ってしゃべっていたのが一番よく聞えた。「結集された—、すべての—」という例のイントネーションはよくないようである。聞いてもらう対象も考えて内容の検討も含めて研究する必要はあるだろう。今後私もできるかぎりこの運動に参加したいと思う。

日本の法律は不当に人民から遠ざけられている。当然許される各種の権利は知らせない事で、実際にはないと同じ状態にあるのではないだろうか。

私があったあるスリの人は、前科があるということで彼が「また刑務所に行くようになる」と思いとどまり、未遂にまで至らなかった犯行で強引に起訴され、国選弁護士ともども検察庁、裁判所一体となって有罪としようとするのに対して一人で抵抗していた。

私はそこで「秘密交通権」を説明し、現在共犯者としてデッチあげられている今一人の被害者（彼らの場合共犯の犯行そのものが未遂以前であるが故に、その見張りという立場の共犯と分離公判すらなしえないという代物であった）と法廷でのサンドイッチ（被告と被告との間に看守をすわらせ会話をさせないやり方）をやめさせ、公判前後の打合せを要求することができることを説明した。

彼はそれを非常に喜び、それさえできたらと張切って裁判にいったが、それが実現したか否かは、私が早く東拘に帰ったため確認できなかった。

私は具体的な権利を広くしらせる事で、「知らせない」事で成立している日本の法体系、支配体系を根本からくずしていける一つの道がありはしないかと思う。犯罪者の発生を科学的に考えるなら、われわれが彼らに対して何らかの感情的優越感を持つことは差別以外の何物もないだろう。

また現実的にも例えば反山口組キャンペーンの展開と弾圧と、この間の我々に対する弾圧には極めて密接な共通性があるように思えるし、われわれが今彼らを差別する事は将来われわれ自身の首をしめるに違いない。獄中活動家の任務としてすべての犯罪者と誠意をもってつきあい、相談にのるという事が大切ではないだろうか。又彼らの経験をきく事は決して無駄ではない。

私の経験では極めて人間的なよい人たちばかりである。そして多くの活動家諸君によって作られてきた作風は一種の尊敬をもってうけとめられている。ことに四年程前は「学生いじめ」を好んでやったような政治ヤクザたちも、今はほとんどそれをしないようである。一文にもならないことであくまで頑張り、三年も四年も獄にいる、それも独房にいるという事は、少なからず尊敬の対象になるようである。多くの活動家によって築かれたこの伝統を大切にしたいものである。

「医療の解放」という意味においてきわめて大きな「革命」であった「裸足の医者」運動と同じ意味で、「裸足の弁護士」運動といったようなものを意識化する必要があると思ったのである。

われわれの運動は広く深く下へ下へと浸透する事によってのみ勝利があるだろう。

獄中通信

連赤敗北における山岳根拠地路線の意義の明確化を〈五〉

東　拘　塩　見　孝　也

氏たちは「反米愛国路線棄ー護持」を連赤敗北の総括視点においていますが、（これは氏達の立場にたてば一応当然のことでしょうが）連赤の敗北は小ブル的自然発生的革命戦争からプロレタリア的革命戦争への転換を課題として、これを「左」翼日和見主義の山岳社会革命主義や合法主義の受動的蜂起主義と闘うなかで、都市にふみとどまりプロレタリアに依拠し、これと一体の政治路線の基礎であり、主客骨格たる資本主義批判を軸とするマルクス＝レーニン主義の獲得により思想と政治問題を解決し、党建設と作風・規律・戦術を解決し、従って根拠地問題を解決することであったのではないですか。以上の課題認識と解決方法・内容を欠落させた無媒介な、歴史的脈絡関係を抜きにした「反米愛国路線」一般の強調は、必然的に「プロレタリア独裁・社会主義路線」に排他的になったり、逆に「革命左派に責任を転嫁している」などの被害妄想におちいったり、連赤内革命左派に「反米愛国路線を何故に放棄せしめるにいたったのか」の主体的総括抜きに（この主体的反省は思想問題と中国革命教条主義を再検討せしめるはず）一対一的水準の批判をおこなったり、あるいは中国革命の教条主義の側面に対しての批判に異常な拒絶反応を示したり、事実問題を客観性を抜きに、恣意的に処理したりする多くの障害を生み出します。

私達は革命左派の諸君と団結することをのぞんでいます。われわれは「マルクス＝レーニン＝毛沢東思想」の綱領的観点に立っており、大局的に一致しているのですから、従ってわれわれが真に団結を強める要望として、毛沢東思想・中国共産党を国際的・歴史的に高く評価し、その指導権を承認することをえたえて、国内的には日本革命の[illegible]生の立場のもとに、日本革命の教条主義の志向を貴君方が克服することをのぞむものです。

実際、氏は戦闘団主義に規定されていないとはいえ、かつてわれわれの革命は「広義の意味では社会主義革命」（七一年十月二十日付書簡）とのべ「教条主義の克服」を掲げ、人民独裁・民族民主革命を放棄し社会主義的プロレタリア独裁社会主義革命に改変する志向をもっていたのですから。

なお「公開質問」に関しては、八月初め文書化し、「序章」誌に公開を依頼しておきました。

九月九日

（おわり）